

SAUL LEITER

Origins in Color

ソール・ライターの原点 ニューヨークの色

生誕100年記念

2023
7.8 SAT →
8.23 WED

渋谷ヒカリエ9F
ヒカリエホール ホールA
東京都渋谷区渋谷2-21-1

主催：Bunkamura、読売新聞社
企画制作：Bunkamura
協力：ソール・ライター財団
後援：J-WAVE 企画協力：コンタクト
お問合せ：050-5541-8600(ハローダイヤル)
※ 休館日未定
※ 開館時間、チケット情報などは決定次第
Bunkamura ザ・ミュージアム HP にてご案内いたします。
↓ <https://www.bunkamura.co.jp/museum/>



Bunkamura

美しい時代へ
東急グループ



SAUL LETTER

Origins in Color

ソール・ライターの原点 ニューヨークの色

生誕100年記念



ソール・ライター「写真」撮影者不詳 © Saul Letter Foundation

2023
7.8 SAT →
8.23 WED

渋谷ヒカリエ9F
ヒカリエホール ホールA

東京都渋谷区渋谷2-21-1

主催：Bunkamura、読売新聞社

企画制作：Bunkamura

協力：ソール・ライター財団

後援：J-WAVE 企画協力：コンタクト

お問合せ：050-5541-8600(ハローダイヤル)

※ 休館日未定

※ 開館時間、チケット情報などは決定次第

Bunkamura ザ・ミュージアムHPにてご案内いたします。

↓ <https://www.bunkamura.co.jp/museum/>



Bunkamura

美しい時代へ
東急グループ

Bunkamuraを支えるオフィシャルサプライヤー

OMRON 鹿島 KIRIN 大和証券グループ ETV 東急グループ

SAUL *Origins in Color* LEITER

ソール・ライターの原点 ニューヨークの色

生誕100年記念

2023

7.8 SAT →

8.23 WED

渋谷ヒカリエ 9F
ヒカリエホール ホールA

休館日なし

11:00-20:00 (最終入場は19:30まで)

主催: Bunkamura、読売新聞社

企画制作: Bunkamura

協力: ソール・ライター財団、NTT ArtTechnology

後援: J-WAVE 企画協力: コンタクト

お問合せ: 050-5541-8600(ハローダイヤル)

Bunkamura

美しい時代へ
東急グループ



“写真は物の見方を教えてくれる、 すべてのものが美しいということも。”

——ソール・ライター



ソール・ライター《無題》撮影年不詳 ©Saul Leiter Foundation

Bunkamura ザ・ミュージアムで過去2回にわたって開催されたソール・ライターの展覧会は、“ソール・ライター風の写真”という言葉が市民権を獲得するほど、それまで日本ではほぼ無名だった写真家の名前を一気に知らしめ、大きな反響を呼び起こしました。

2023年4月からのBunkamura 休館（オーチャードホールを除く）に伴い、Bunkamura ザ・ミュージアムは、ソール・ライター生誕100年を記念し、ヒカリエホールにて本展を開催します。

50代でキャリアの表舞台から姿を消し、富にも名声にも関心を示さず、淡々と自らの美意識に忠実に生きていたソール・ライターが80代になった2006年、世界中の写真ファンを魅了し続けるドイツのシュタイデル社から刊行された初の写真集『Early Color』

によって、再び脚光を浴びることになります。

2013年、ソール・ライターがこの世を去った時点で、未整理の作品はカラースライドだけでも数万点にのぼり、翌年に創設されたソール・ライター財団によって、アーカイブのデータベース化が着手され始めました。没後にも関わらず、ソール・ライターは常に新たな発見が続く“発展途上”の作家でもあります。

本展では、新たに発掘された作品による大規模なカラースライド・プロジェクション、未公開のモノクロ写真、絵画など最新作品群を含む400点以上の作品を通して、これまで紹介していなかった知られざるソール・ライターの素顔と、「カラー写真のバイオニア」と称され世界中を驚かせ続ける色彩感覚の源泉に迫ります。

Saul Leiter ソール・ライター

1923年12月3日、ペンシルバニア州ピッツバーグに生まれる。父親はユダヤ教の聖職者。1946年、画家を志し、神学校を中退してニューヨークへ移住。1958年、『ハーパーズ・バザー』誌でカメラマンとして仕事を始め、80年代にかけてファッション写真を撮影。1981年、ニューヨーク5番街にあった自分のスタジオを閉鎖。2006年、ドイツの出版社シュタイデルが初の写真集『Early Color』を出版。2012年、ドキュメンタリー映画「写真家ソール・ライター 急がない人生で見つけた13のこと」製作。2013年11月26日、ニューヨークにて死去。享年89歳。



《ライトボックスを見るソール・ライター》
2013年 ©Margit Erb

Highlights 展覧会のみどころ

- 1 1950～60年代頃、黄金期ニューヨークを写し撮った
未公開スナップ写真を多数展示
- 2 知られざるソール・ライターの素顔 ニューヨークで交流した
後の巨匠アーティストたちのポートレートを紹介
- 3 唯一無二のセンスあふれる
**1950～60年代の『ハーパーズ・バザー』での
ファッション写真を一挙公開**
- 4 カラー写真約250点を10面の大スクリーンに投影する迫力の展示空間
**大規模プロジェクションで体感する
ソール・ライターの色彩の世界**

要チェック/ ザ・ミュージアム SNS

@BunkamuraMuseum
@bunkamura_the_museum
Bunkamura ザ・ミュージアム

SNS
詳細は
こちら



チケットは便利なオンラインチケット「MY Bunkamura」をご利用ください。お得な前売券のほか、当日券の購入もチケット窓口と並び便利！ MY Bunkamura で購入すると当日券が100円引き。

入場料(税込)	一般	大学・高校生	中学・小学生	ソール・ライター展×平間至展 セット券(一般のみ)
前売	1,600円	800円	500円	2,500円
当日	1,800円	1,000円	700円	3,000円

〈Special Ticket〉同時開催「平間至展」とのお得なセット券！

- ※ オンラインチケットMY Bunkamuraでは前売セット券のみ取扱い。
- ※ 当日セット券は当日窓口のみ取扱い。(ソール・ライター展 非売品ポストカード付)
- ※ 学生券をお求めの場合は、学生証のご提示をお願いします。(小学生は除く)
- ※ 障がい者手帳のご提示でご本人様とお付添いの方1名様は半額となります。
(一般900円、大学・高校生500円、中学・小学生350円)
- ※ 当日窓口でご購入ください。セット券は割引対象外です。
- ※ 未就学児は入場無料

前売券 [販売期間] 2023年6月9日|金-7月7日|金|
[販売場所] オンラインチケット MY Bunkamura、
東急シアターオーブ/Bunkamura チケットカウンター(渋谷ヒカリエ2F/11:00～18:00)、
チケットぴあ(Pコード:686-510)、ローソンチケット(Lコード:33086)、e+(イープラス)他

同時開催「平間至展 写真のうた —PHOTO SONGS—」
会場:ヒカリエホール ホールB(渋谷ヒカリエ9F) 会期:2023年7月8日|土-8月23日|水| ※休館日なし

- 本展は会期中すべての日程で「オンラインによる事前予約」が可能です。ご予約なしでもご入場いただけますが、混雑時にはお待ちいただく場合がございます。
 - 状況により、会期・開場時間等が変更となる場合がございます。
- ※ 予約方法、展覧会のイベント・タイアップ情報等の最新情報は本展公式HPにてご確認ください。

最新情報は
こちら



ヒカリエホール ホールA (渋谷ヒカリエ9F) 東京都渋谷区渋谷2丁目21-1



◎ JR線・京王井の頭線「渋谷駅」と2F連絡通路で直結 ◎ 東京メトロ銀座線「渋谷駅」と1Fで直結
◎ 東急東横線・田園都市線・東京メトロ半蔵門線・副都心線「渋谷駅」B5出口と直結
※ 駐車場の詳細は渋谷ヒカリエHPをご確認ください
www.hikarie.jp (ヒカリエホールのご利用は駐車場の割引サービス対象外です)

Bunkamuraを支えるオフィシャルサプライヤー

OMRON 鹿島 KIRIN 大和証券グループ 東急グループ

ニューヨーク 1950-60年代

NEW YORK 1950S-'60S

1950~60年代頃、黄金期ニューヨークを写し撮った未公開スナップ写真

文化の新たな中心地として抽象表現主義などの芸術の新潮流が次々と生まれたニューヨーク。この地でソール・ライターは、意欲的な若い芸術家たちとの交流の中で、写真の表現メディアとしての可能性に目覚め、絵筆とともにカメラで自分の世界を追求していくようになります。モノクロによるスナップ写真は、絶妙な構図と黒と白で織りなされる美しいプリント表現（大部分のプリントはソール・ライター自身によるもの）によって詩情あふれる日常の物語を想起させます。



“人生には、それぞれの美を追求する価値がある。そのことを否定したくない。”

——ソール・ライター

- 1《無題》撮影年不詳 2《無題》撮影年不詳 3《歩道》1954年頃
- 4《アンディ・ウォーホル》1952年頃
- 5《ジョン・ケージと絵を見るにきた際、ストロゴ・テストのためにポーズをとるロバート・ラウシェンバーク》撮影年不詳
- 6《マースとジョン（マース・カニングハムとジョン・ケージ）》1952年頃
- 7《無題（セロニアス・モンク）》撮影年不詳
- 8《無題（ユージン・スミス）》1950年代 すべてソール・ライター © Saul Leiter Foundation

“有名人を撮ったからって、良い写真になるとは限らない。”

——ソール・ライター

ソール・ライターによる後の巨匠たちのポートレート

撮影活動を始めたころ、ソール・ライターは身近なアーティストたちのポートレートを数多く残しています。これらの写真は、彼が野心あふれる芸術家たちの輪の中にいたことを示す興味深い資料であるとともに、当時、爆発的なエネルギーで新しい表現が日々生み出されていたニューヨークのアートシーンの息吹を感じさせます。



5. ロバート・ラウシェンバーク



4. アンディ・ウォーホル



6. マース・カニングハム（振付家）
ジョン・ケージ（作曲家）



7. セロニアス・モンク
（ジャズ・ピアニスト）



8. ユージン・スミス（写真家）



ソール・ライターとファッション写真

SAUL LEITER IN FASHION

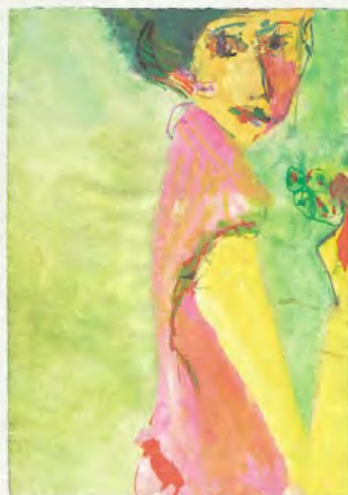
アートディレクターのヘンリー・ワルフ率いる『ハーバース・バザー』における1958年から1960年代のソール・ライターのファッション写真を一堂に公開。商業性の求められるジャンルにおいても自らの美意識を存分に発揮し、斬新かつエレガントなソール・ライターの写真から、世界の中心地として黄金期を迎えた豊かなアメリカ文化の芳香を感じていただけます。



カラーの源泉——画家ソール・ライター

COLOR INSPIRATIONS

ソール・ライターは「画家の眼を持つ写真家」でした。写真家として成功したのちも、日記を綴るように絵を描き続けました。「絵画は創造であり、写真は発見だ」と語っていた彼にとって、絵画制作は自らの生きる原動力でもありました。その作品には、印象派や日本の浮世絵や特にピエール・ボナール、エドゥアール・ヴューイヤールといったナビ派の影響が見られますが、特筆すべきはその色彩感覚です。



- 9 ソール・ライター『ハーバース・バザー』1963年2月号のための撮影カット
- 10『ハーバース・バザー』1958年10月号表紙（ソール・ライター撮影）
- 11『ハーバース・バザー』1959年4月号表紙（ソール・ライター撮影）
- 12《無題》1940年頃 13《お気に入りの1点》1960年頃
- 14《無題》撮影年不詳 15《無題》撮影年不詳 16《無題》撮影年不詳 17《無題》撮影年不詳 18《無題》撮影年不詳
- 10,11は© Harper's Bazaar/Hearst Magazine Media, Inc. その他はすべてソール・ライター © Saul Leiter Foundation

カラースライド・プロジェクション

DISCOVERIES IN COLOR

生前のソール・ライターがプリントの状態で確認したカラー作品はわずか200点余りであり、彼にとってカラー写真はアトリエ壁面に投影するなど、光を通した状態で見るカラースライドでした。会場では、厳選したカラースライドの複製を多数展示し、覗き込んで写真を楽しむというソール・ライターの鑑賞方法を追体験します。

大規模プロジェクションで体感するソール・ライターの色彩の世界

また、本展の目玉として、ヒカリエホールの大空間を利用し、10面の大型スクリーンに最新の作品群約250点を投影します。カラー写真をスライドショーで投影して見ると、古くて新しい鑑賞方法で、ソール・ライターの卓越した色彩の世界に誘い出し、迫力の展示によってカラー写真の魅力の新たな扉を開きます。

“ソールは、スライドの1枚1枚が写真としての価値を認められるべきだと信じていた。”

——マーギット・アープ（ソール・ライター財団代表）



14	15	16
	17	18

SAUL LEITER

*Origins
in
Color*

ソール・ライターの原点 ニューヨークの色

生誕
100年
記念

2023

7.8 SAT →

8.23 WED

渋谷ヒカリエ 9F

ヒカリエホール ホールA

東京都渋谷区渋谷 2-21-1

PRESS
RELEASE

Bunkamura



Saul Leiter ソール・ライター

1923年12月3日、ペンシルバニア州ピッツバーグに生まれる。父親はユダヤ教の聖職者。1946年、画家を志し、神学校を中退してニューヨークへ移住。1958年、ヘンリー・ウルフがアートディレクターに就任した『ハーバース・バザー』誌でカメラマンとして仕事をはじめ。その後、80年代にかけて『ハーバース・バザー』をはじめ多くの雑誌でファッション写真を撮影。1981年、ニューヨーク5番街にあった商業写真用の自分のスタジオを閉鎖。1993年、カラー写真制作のためイルフォードから資金提供を受ける。2006年、ドイツの出版社シュタイ

デルが初の写真集『Early Color』出版。2008年、パリのアンリ・カルティエ＝ブレッソン財団でヨーロッパ初の大規模回顧展開催。2012年、トーマス・リーチ監督によるドキュメンタリー映画「写真家ソール・ライター 急がない人生で見つけた13のこと」製作。2013年11月26日、ニューヨークにて死去。享年89歳。2014年、ソール・ライターの作品を管理する目的でソール・ライター財団創設。2017年「ニューヨークが生んだ伝説 写真家ソール・ライター」展、2020年「永遠のソール・ライター」展をBunkamura ザ・ミュージアムにて開催。



ソール・ライター
『セルフ・ポートレート』1960年頃
© Saul Leiter Foundation

会期

2023年7月8日|土| - 8月23日|水| ※休館日未定

開場時間

11:00-20:00 (最終入場は19:30まで)

会場

ヒカリエホール ホールA (渋谷ヒカリエ9F)

主催 Bunkamura、読売新聞社

企画制作 Bunkamura

協力 ソール・ライター財団

後援 J-WAVE

企画協力 コンタクト

お問合せ先 050-5541-8600 (ハローダイヤル)

料金 (税込)

	一般	大学・高校生	中学・小学生
当日	1,800円	1,000円	700円
前売	1,600円	800円	500円

※学生券をお求めの場合は、学生証のご提示をお願いします。(小学生は除く)

※障がい者手帳のご提示でご本人様とお付添いの方1名様は半額となります。

(一般900円、大学・高校生500円、中学・小学生350円)

当日窓口でご購入ください。

※未就学児は入場無料

ヒカリエホール ホールBにて同時開催する「平間至展」

とのセット券の販売を予定しています。その他、チケットや

休館日に関する詳細は決定次第公式HPにてご案内します。

<https://www.bunkamura.co.jp/pickup/exhibition.html>



【同時開催】「平間至展 写真のうた —PHOTO SONGS—」

会場：ヒカリエホール ホールB (渋谷ヒカリエ9F)

会期：2023年7月8日|土| - 8月23日|水| ※休館日未定

ソール・ライター《無題》撮影年不詳 © Saul Leiter Foundation

広報に関する
お問い合わせ先

「ソール・ライターの原点」広報事務局 (株式会社OHANA内) 担当：妹尾、細川
Tel: 03-6869-7881 Fax: 03-6869-7801 E-mail: saulleiter@ohanapr.co.jp

掲載の申込、プレスリリース、広報画像申込はこちら → https://www.artpr.jp/prs/23_sulleiter



“写真は物の見方を教えてくれる、
すべてのものが美しいということも。”

——ソール・ライター

Bunkamura ザ・ミュージアムで過去2回にわたって開催されたソール・ライターの展覧会は、“ソール・ライター風の写真”という言葉が市民権を獲得するほど、それまで日本ではほぼ無名だった写真家の名前を一気に知らしめ、大きな反響を呼び起こしました。

2023年4月10日からのBunkamura 休館（オーチャードホールを除く）に伴い、Bunkamura ザ・ミュージアムは、ソール・ライター生誕100年を記念し、渋谷ヒカリエ9F・ヒカリエホールにて展覧会「ソール・ライターの原点 ニューヨークの色」を開催します。

50代でキャリアの表舞台から姿を消し、富にも名声にも一切の関心を示さず、淡々と自らの美意識に忠実に生きていたソール・ライターが80代になった2006年、世界中の写真ファンを魅了し続けるドイツのシュタイデル社から刊行された初の写真集『Early Color』によって、再び脚光を浴びることになります。2013年、ソール・ライターがこの世を去った時点で、その作品の大半は未整理のままでしたが、翌年に創設されたソール・ライター財団によって、アーカイブをデータベース化する「スライド・プロジェクト」が着手されました。未整理の作品はカラーズライドだけでも数万点にのぼり、業績の全貌が明らかになるには、さらに十数年の歳月が必要とも言われています。没後にも関わらず、ソール・ライターは常に新たな発見が続く“発展途上”の作家でもあります。

本展では、新たに発掘された作品による大規模なカラーズライド・プロジェクション、未公開のモノクロ写真、絵画など最新作品群を含む400点以上の作品を通して、これまで紹介していなかった知られざるソール・ライターの素顔と、「カラー写真のバイオニア」と称され世界中を驚かせ続ける色彩感覚の源泉に迫ります。

1 1950～60年代頃、黄金期ニューヨークを写し撮った
未公開スナップ写真を多数展示

2 知られざるソール・ライターの素顔
ニューヨークで交流した
後の巨匠アーティストたちのポートレートを紹介

3 唯一無二のセンスあふれる
1950～60年代の『ハーパーズ・バザー』での
ファッション写真を一挙公開

4 カラー写真約250点を10面の大スクリーンに投影する迫力の展示空間
大規模プロジェクションで体感するソール・ライターの色彩の世界

Highlights

展覧会のみどころ

NEW YORK 1950S-'60S

ニューヨーク 1950-60年代

1946年、ソール・ライターは画家を志して、当時、芸術の新たな中心地として抽象表現主義などの芸術の新潮流が次々と生まれたニューヨークへと向かいました。この地でソール・ライターは、意欲的な若い芸術家たちとの交流の中で、写真の表現メディアとしての可能性に目覚め、絵筆とともにカメラで自分の世界を追求していきようになります。本展では、ソール・ライターが写真に取り組みはじめた1950~60年代頃のモノクロによる未発表のスナップ写真作品群と、当時交流のあったアーティストたちのポートレートを2部構成で紹介しします。

“人生には、それぞれの美を追求する価値がある。そのことを否定したくない。”

——ソール・ライター

ソール・ライターが写し撮った モノクロスナップ写真

モノクロによるスナップ写真は、絶妙な構図と黒と白で織りなされる美しいプリント表現（大部分のプリントはソール・ライター自身によるもの）によって詩情あふれる日常の物語を想起させます。画家であったソール・ライターだからこそ、写真というメディアでしかなしえることのできないスナップ写真の特性を理解していたとも言えます。構図や被写体などカラー写真との共通点も認められ、独自の世界観を見ることが出来ます。

1《無題》1950年代
2《無題》撮影年不詳
3《歩道》1954年頃
4《無題》撮影年不詳
すべてソール・ライター
© Saul Leiter Foundation



1 ソール・ライター『ハーバース・バザール』1963年2月号のための撮影カット © Saul Leiter Foundation
2 『ハーバース・バザール』1958年10月号表紙（ソール・ライター撮影） 3 『ハーバース・バザール』1959年4月号表紙（ソール・ライター撮影）
4 『ハーバース・バザール』1963年8月号表紙（ソール・ライター撮影） 2,3,4は© Harper's Bazaar/Hearst Magazine Media, Inc.

ソール・ライターによる 後の巨匠たちのポートレート

画家になるためにニューヨークを目指したソール・ライターも、明日を目指して新天地に集まってきた若きアーティストの一人でした。友人のアーティスト、リチャード・ブセット・ダートから本格的に写真術を学んだソール・ライターは、身近なアーティストたちのポートレートを数多く残しています。同じピッツバーグ出身のアンディ・ウォーホルをはじめ、ロバート・ラウシェンバーグ、マース・カニングハム（振付家）、ジョン・ケージ（作曲家）、ユージン・スミス（写真家）、セロニアス・モンク（ジャズ・ピアニスト）といった後に巨匠と称されるようになるアーティストや写真家たちのポートレートを紹介します。これらの写真は、若きソール・ライターが野心あふれる芸術家たちの輪の中にいたことを物語る興味深い資料であるとともに、当時、爆発的なエネルギーで新しい表現が日々生み出されていたニューヨークのアートシーンの息吹を感じさせてくれます。



《アンディ・ウォーホル》1952年頃

“有名人を撮ったからって、良い写真になるとは限らない。”

——ソール・ライター



《無題（ユージン・スミス）》
1950年代



《無題（セロニアス・モンク）》
撮影年不詳



《マースとジョン（マース・カニングハムとジョン・ケージ）》
1952年頃



《ジョン・ケージと絵を見に来た際、
ストロボテストのためにポーズをとる
ロバート・ラウシェンバーグ》撮影年不詳

すべてソール・ライター
© Saul Leiter Foundation

SAUL LEITER IN FASHION

ソール・ライターとファッション写真

ニューヨークの多くの若きアーティストと同じく、経済的な問題に直面したソール・ライターは、写真の技術を活かして生活の糧を得ることを思いつきました。『ライフ』『エスクエイア』といった雑誌に写真が掲載されるようになり、1958年からヘンリー・ウルフがアートディレクターを務める『ハー

バース・バザール』誌のカメラマンとしてファッション写真を任されるようになります。当時、カラー写真は商業的な用途で使われることが多く、入稿された原稿（ポジ）が写真家のもとに返却されることは皆無に近い状況でした。そのため、雑誌に掲載されたソール・

ライターの多くのカラー写真のポジも現存しているものは一部しかなく、今では掲載誌のみがその仕事を伝える貴重な証言となっています。本展では、1958年から1960年代の『ハーバース・バザール』におけるソール・ライターのファッション写真を一堂に公開します。

「カラー写真は、宣伝広告やいわゆる深刻ではないもの用である」という当時の偏見を徹塵も持つことなく、「仕事」においても自らの美意識を存分に発揮したソール・ライターの世界観とともに、1950年代から60年代にかけての豊穡なアメリカ文化の芳香を感じていただけます。

DISCOVERIES IN COLOR

カラースライド・プロジェクション

“ソールは、スライドの1枚1枚が
写真としての価値を認められるべきだと信じていた。”

——マーギット・アープ（ソール・ライター財団代表）

カラー写真は20世紀の写真史において長らく注目されず、美術作品として扱われたのは、もっぱらモノクロ写真でした。近年になってカラー写真に対する見直しの機運が高まり、写真史の読み直しが迫られています。その契機の一つとなったのが、ソール・ライターの『Early Color』だったとも言えます。

カラー写真が美術作品として軽視されてきた理由は、主に広告や雑誌の撮影

に使用されていたこと、プリントの工程が技術的に複雑で経費がかかったこと、プリントの耐久性が脆弱だったことなどいくつかありますが「なぜ色を軽視するのか、私には理解できない。色は人生における大切な要素であり、その存在は写真においても尊重されるべきだ」と語っていたソール・ライターにとって、カメラで日常のスケッチをカラーで描くことは当たり前のことであり、そこに一縷

の疑念も抱くことはありませんでした。生前のソール・ライターがプリントの状態を確認したカラー作品はわずかに200点余りのみであり、彼にとって、カラー写真はライトボックスの上に置いたり、アトリエ壁面に投影するなど、光を通した状態で見るカラースライドでした。本展では、カラースライド(参考写真:7)の複製を多数展示するほか、会場2カ所でのプロジェクションにてソール・ラ

イターのカラー写真を紹介します。一つ目はソール・ライター自身が自宅でカラー写真を映写していた壁面サイズでの代表作『Early Color』の作品群の投影です。類まれなカラー写真で再び脚光を浴びることになったソール・ライターの名作の数々を振り返ります。二つ目は、本展の見どころとなる、ヒカリエホールの大空間を利用した10面の大型スクリーンによる大規模プロ

ジェクションです。2020年以降に見えられたカラースライドを含む最新の作品群約250点を投影する迫力の展示で、ソール・ライターの卓越した色彩感覚を再発見します。カラー写真をスライドショーで投影して見るという、古くて新しい鑑賞方法で、ソール・ライターの創り出した色彩豊かな世界に鑑賞者を誘い出し、カラー写真の魅力の新たな扉を開きます。



1



2



4



6



3



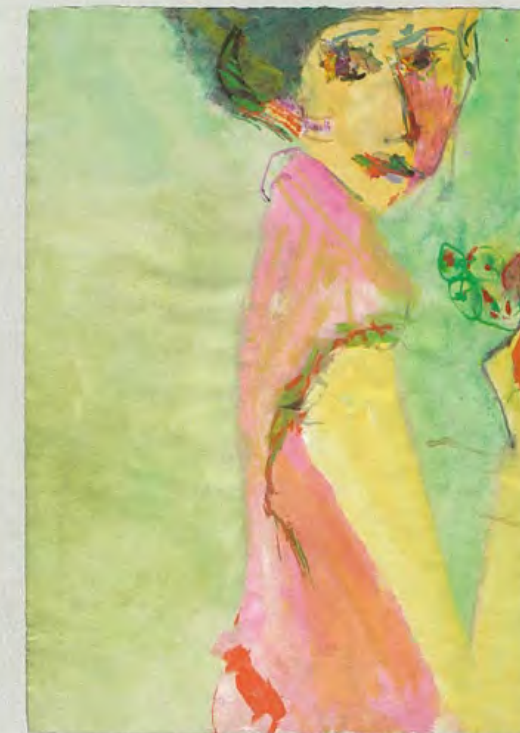
5



7

COLOR INSPIRATIONS

カラーの源泉 — 画家 ソール・ライター



1



2



3

ソール・ライターは「画家の眼を持つ写真家」でした。写真家として成功したのちも、彼は生涯絵筆を折ることはなく、世間から隠遁後も日記を綴るように絵を描き続けました。「絵画は創造であり、写真は発見だ」と語っていた彼にとって、絵画は自らの生きる原動力でもありました。ソール・ライターの絵画には、印象派や日本の浮世絵や特にピエール・ボナール、エドゥアール・ヴューヤールといったナビ派の影響が見られますが、特筆すべきはその色彩感覚です。縦横無尽に色と一体化し、遊ぶように描かれた絵画作品は、ソール・ライターが唯一無二のカラー写真の世界を創り上げることが出来た秘密を解き明かす鍵となります。

1《無題》1960年頃 2《お気に入りの1点》1960年頃 3《無題》制作年不詳 すべてソール・ライター © Saul Leiter Foundation

EAST 10TH STREET

ついでに
すかさず
終の棲家

“何もしないでいることには、
ある種の気高さがある。”

——ソール・ライター



2015年に日本で公開されたドキュメンタリー映画「写真家ソール・ライター 急がない人生で見つけた13のこと」でも、その様子がつぶさに紹介されたアパート。ニューヨークのイースト・ヴィレッジにあるこのアパートは、ソール・ライターが60年間住み続け、現在ではソール・ライター財団の事務所として使用されています。膨大な作品と資料が現在も息づくアトリエの一部をヒカリエホールの空間に再現します。

Saul Leiter ソール・ライター

1923年12月3日、ペンシルバニア州ピッツバーグに生まれる。父親はユダヤ教の聖職者。1946年、画家を志し、神学校を中退してニューヨークへ移住。1958年、ヘンリー・ウルフがアートディレクターに就任した『ハーバース・バザー』誌でカメラマンとして仕事を始める。その後、80年代にかけて『ハーバース・バザー』をはじめ多くの雑誌でファッション写真を撮影。1981年、ニューヨーク5番街にあった商業写真用の自分のスタジオを閉鎖。1993年、カラー写真制作のためイルフォードから資金提供を受ける。2006年、ドイツの出版社シュタイ

デルが初の写真集『Early Color』出版。2008年、パリのアンリ・カルティエ＝ブレッソン財団でヨーロッパ初の大规模回顧展開催。2012年、トーマス・リーチ監督によるドキュメンタリー映画「写真家ソール・ライター 急がない人生で見つけた13のこと」製作。2013年11月26日、ニューヨークにて死去。享年89歳。2014年、ソール・ライターの作品を管理する目的でソール・ライター財団創設。2017年「ニューヨークが生んだ伝説 写真家ソール・ライター」展、2020年「永遠のソール・ライター」展をBunkamura ザ・ミュージアムにて開催。



ソール・ライター
『セルフ・ポートレート』1960年頃
© Saul Leiter Foundation

会期
2023年7月8日 | 土 | - 8月23日 | 水 ※休館日未定

開場時間
11:00-20:00 (最終入場は19:30まで)

会場
ヒカリエホール ホールA (渋谷ヒカリエ9F)

主催 Bunkamura、読売新聞社
企画制作 Bunkamura
協力 ソール・ライター財団
後援 J-WAVE
企画協力 コンタクト

お問合せ先 050-5541-8600 (ハローダイヤル)

	一般	大学・高校生	中学・小学生
当日	1,800円	1,000円	700円
前売	1,600円	800円	500円

※学生券をお求めの場合は、学生証のご提示をお願いします。(小学生は除く)

※障がい者手帳のご提示でご本人様とお付添いの方1名様は半額となります。
(一般900円、大学・高校生500円、中学・小学生350円)
当日窓口でご購入ください。

※未就学児は入場無料

ヒカリエホール ホールBにて同時開催する「平間至展」
とのセット券の販売を予定しています。その他、チケットや
休館日に関する詳細は決定次第公式HPにてご案内します。
<https://www.bunkamura.co.jp/pickup/exhibition.html>



【同時開催】「平間至展 写真のうた —PHOTO SONGS—」
会場：ヒカリエホール ホールB (渋谷ヒカリエ9F)
会期：2023年7月8日 | 土 | - 8月23日 | 水 | ※休館日未定



ソール・ライター《無題》撮影年不詳 © Saul Leiter Foundation

広報に関する
お問い合わせ先

「ソール・ライターの原点」広報事務局 (株式会社OHANA内) 担当：妹尾、細川
Tel: 03-6869-7881 Fax: 03-6869-7801 E-mail: saulleiter@ohanapr.co.jp

掲載の申込、プレスリリース、広報画像申込はこちら → https://www.artpr.jp/prs/23_saulleiter



SAUL *Origins in Color* LEITER

ソール・ライターの原点 ニューヨークの色

生誕
100
年
記念

2023
7.8 SAT →
8.23 WED

渋谷ヒカリエ9F
ヒカリエホール ホールA
東京都渋谷区渋谷2-21-1

PRESS
RELEASE

Bunkamura



ソール・ライター《無題》撮影年不詳 © Saul Leiter Foundation